

〔原著〕

## 非行少年の、進路決定自己効力感、 問題行動歴及び親の養育態度の関連について

筑波大学大学院人間総合科学研究科：山本 麻奈  
筑波大学人間系：濱口 佳和

Relationship between Career Decision-Making Self-Efficacy, Delinquency career  
and Nurture attitude of the parent among juvenile delinquent

Mana Yamamoto and Yoshikazu Hamaguchi

### 問題および目的

刑務所出所者や少年院出院者（以下「刑務所出所者等」という。）の再犯・再非行については、「仕事や住居や相談相手がいない状況で引き起こされているケースが多く、刑務所出所者等の仕事や住居等の生活基盤を整えて円滑な社会生活への移行を促進することが社会復帰への鍵となる。」（法務総合研究所，2012）とされ、法務省は、再犯防止・改善更生のための社会復帰支援策の一つとして、就労に関する矯正処遇等・矯正教育に取り組んでいる。具体的には、「職業についての知識・技能及びこれを応用する能力を付与することだけでなく、勤労意欲の喚起や勤労を重んじる態度を培うことなど」を目的とするほか、「社会人としての意識を高めさせるため」の授業や実習等を実施している。

このような中、刑務所出所者等の社会復帰における課題や必要とする支援を明らかにするために、保護司、受刑者及び少年院在院者を対象に調査を実施した法務総合研究所（2012）によると、本件犯行等前において不安定就労等に問題意識のなかった者が受刑者・少年院在院者ともに2割を超えていた。また、本件犯行等時に無職、日雇い、短期アルバイト等の就労状況にあっても、それを「不安定」と捉えなかったり、問題と考えなかったりするなど、就労状況等に関する認識の在り方に問題があった者が相

当数いることが明らかになっている。保護司から客観的に見ると、本人の職業観等において基本的に必要なことが身に付いていない場合が多く、この傾向は特に少年に顕著であると同調査において指摘されているが、上述のとおり、受刑者・少年院在院者自身は、その点での指導・助言等を必要と考える者が少ないなど、問題意識自体の欠如が、安定した就労を困難にしている一因となっていることが考えられる。

こうしたことから、再犯防止・改善更生のための社会復帰支援策をより効果的なものにするためには、対象者の仕事に関する基本的な考え方や能力を改善・向上する必要があると考え、その実態を詳細に把握する必要があると考える。上述のとおり、特に少年において、職業観等における問題意識が低いと指摘されていることから、本研究においては、非行少年を対象に、進路決定に対する期待・自信の程度について把握することを目的とし、進路を決定するにあたって必要な行動に対する自己効力を示す概念である「進路決定自己効力感」（Taylor, & Betz, 1983）を用いることとした。

また、法務総合研究所（2012）において、少年院在院者の「入院時の保護者が実父母の者」は、「安心して生活できる場所があつて、問題はなかった」と回答した者が3分の2近くを占めており、非行少年においては、親の関わり方が自己の行動に対する問題意識の低さに影響し

ていることも推察できる。

そこで、本研究では、①非行少年における進路決定自己効力感の態様について、②非行少年における進路決定自己効力感と問題行動との関連について、③非行少年における進路決定自己効力感と現在までの親の養育態度との関連について、それぞれ確認することとした。

## 方 法

### 調査対象者

2007年2月1日から同年3月31日までに、調査対象となる少年鑑別所に在所した少年に対し、調査の際「あなたの考えと一番近いものを選んでください」という指示を行い、在所少年による自己記入式により実施した。後述する調査への協力は任意とし、協力が得られ、かつ有効回答が得られたのは、56人（男子少年48人、女子少年8人；平均年齢16.8歳、 $SD=1.6$ 、14-19歳；少年鑑別所平均入所回数1.4回、 $SD=0.7$ 、1-4回）であった。

### 本研究で用いた指標

**本件逮捕時の就業・就学状態** 本件逮捕時における就業・就学状態として、無職（学生を除く）、仕事をしていた（学生を除く）、中学生、高校生（全日制、定時制、通信制）のいずれか一つを選択することとした。

**現在の進路決定自己効力感** 進路決定自己効力感を測定する尺度については、長谷川（1995）の中学生用進路決定に対する自己効力尺度（Career Decision-Making Self-Efficacy Scale；以下「CS尺度」という。）を使用し、現在の状況について、「あてはまる」（4点）、「どちらかというにあてはまる」（3点）、「どちらかというにあてはまらない」（2点）、「あてはまらない」（1点）の4件法によりたずねた。今回、調査対象者の年齢が多岐にわたるものの中学生用の尺度を用いたことは、調査対象者が少年鑑別所に在所中であるということ考慮し、項目数が少なく限られた余暇時間内に実施可能であること、また調査対象者への精神的負担が少なく済むこと、さらに、平易な表現を使用しており

あらゆる知的水準の調査対象者に対応可能なことなどを重要視したという理由がある。

**現在までの親の養育態度** 親の養育態度に関する尺度については、Parental Bonding Instrument（以下「PBI」という。）（Parker, Tupling, & Brown, 1979）の日本語訳（藤井, 1994）及びInventory of Parent Attachment（以下「IPA」という。）（Armsden, & Greenberg, 1987）の日本語訳（藤井, 1994）を使用し、本件で逮捕される以前の状況について、いずれも「非常によくあてはまる」（5点）、「あてはまる」（4点）、「どちらかというにあてはまる」（3点）、「どちらかというにあてはまらない」（2点）、「あてはまらない」（1点）、「全くあてはまらない」（0点）の6件法によりたずねた。これらについては、井上・大井・西村・井森・斉藤（2006）により、PBIは22項目からなり、「情愛」（「いつも暖かく親しみのある声で話しかけてくれた」「私に絶えず微笑みかけてくれた」「私に優しく情愛があった」「私とあれこれ話し合うのを楽しみにしていた」「私と話し合うということはなかった（逆転）」「私には気持ちの上で冷たかった（逆転）」「私が望んでいるのに十分助けてくれなかった（逆転）」「私の抱えている問題や悩みを理解してくれていたと思う」「気分的に混乱したようなときは、気持ちを落ち着かせてくれた」）、「依存期待」（「私のことを、父・母がいなければ自分のことも処理できないと思っていた」「私のことを、つとめて父・母に依存させようとしていた」「私を子ども扱いしがちだった」「私のすることを何でもコントロールしがった」「私には過保護だった」「私に大人になってほしくないようだった」「私のプライバシーを無視していた」）、「決定尊重」（「私の望みのままに自由にさせてくれた」「私が望めば、いつも外出させてくれた」「どんな服装をしようと、私の好きなようにさせていた」「私自身に決定を下させた」「私のしたい大抵のことはやらせてくれた」「物事を、私が自分自身で決めるのを望んでいた」）の3因子構造であることが確認されており（それぞれ、 $\alpha$ 係数は、.91, .86, .79）、IPAは18項目からなり、「信

頼」「両親は私の判断を信用してくれた」「私の両親は私の気持ちを大事してくれた」「親子で問題を話し合うとき、両親は私の意見を尊重してくれた」「両親はあるがままの私を受け入れてくれた」「私は両親を心から信頼している」「私の両親は、親としてとてもいい親だったと思う」)、「コミュニケーション」(「私は両親に自分の悩み事や問題を話していた」「結局分かってもらえないだろうと思いつつ、両親に自分の気持ちを打ち明けていた」「苦労している問題について、両親に親としての意見を聞くことがよくあった」「私に何か悩み事があると、両親はすぐ察しがついたようだ」「両親は、私が困っていることを打ち明けるようにいつも励ましてくれていた」「両親は私に何か困っていると思ったときは、その問題について尋ねてくれた」)、「疎外」(「両親が察しているよりも私のイライラは激しいものだった」「家では、私はついイライラしがちだった」「誰を頼ればよいのか分からない時期があった」「私は両親に対して、腹立たしい思いをしたことがよくあった」「私は誰も理解してくれないと感じていた」「ある時期私が苦労していたことを両親は理解できなかった」)の3因子構造であることが確認されている(それぞれ、 $\alpha$ 係数は、.90, .88, .86)。

いずれにおいても、これらは調査対象者の自記式によるものであり、客観的な事実がどうであれ、調査対象者が親の養育態度についてどう認知しているかを確認するものである。

**現在までの問題行動歴** 本件を含め、これまで経験した加害行動として、「粗暴犯」(「殴ったり蹴ったり、人に暴力をふるったこと」「暴力をふるって相手にけがをさせたこと」「人に暴力をふるうため、バットや刃物などの武器を使ったこと」「お金や物を手に入れるために相手を脅したこと」)、「財産犯」(「原付、オートバイ、自動車等を盗んだこと」「万引きしたこと」「知り合いの持ち物やお金を盗んだこと」「ひったくりをしたこと」)、「性犯」(「人の体を触る、服を脱がすなど、むりやり性的な接触をしたこと」「むりやり性行為をしたこと」)、「物質乱用」(「薬物を使用したこと」「酒を飲んで暴れたり

意識をなくしたりしたこと」)、「住居侵入」(「他人の家や学校等の建物に侵入したこと」)に対し、「ほとんど毎日」(5点)、「一週間に1回程度」(4点)、「2～3か月に1回程度」(3点)、「半年に1回程度」(2点)、「1～2回ほどしたことがある」(1点)、「全くない」(0点)の6件法によりたずねた。得点が高いほど問題行動が多くなる。

#### 倫理的配慮

本研究は、著者の所属機関で実施方法、データの管理方法等について所属機関の長の承諾を得た上で実施された。調査対象とするにあたっては、各対象者から書面による同意を得て実施し、同意しない場合でも同所における処遇及び家庭裁判所の審判において不利益を被らないことを保障した。また、本研究によって得られた情報は、研究用IDを振り、匿名化の処理がなされたデータセットをもとに解析を行った。

## 結 果

### ①非行少年における進路決定自己効力感の態様について

長谷川(1995)のCS尺度について、尺度作成時の調査対象の違いから、本研究において改めて因子分析を行うこととした。10項目の質問項目を用いて因子分析(一般化された最小2乗法、プロマックス回転)を行った結果、固有値の推移及び因子の解釈可能性の点から、長谷川(1995)と同様、2因子解として解釈することが妥当と考えられた。その因子負荷及び各項目の平均値・標準偏差をTable 1に示す。第1因子は、自らの興味、適性、能力等を理解した上で主体的に進路決定を行えるかどうかをたずねる質問において負荷量が高く、「主体的決定」とした。第2因子は、将来の生き方、目標等についてたずねる質問において負荷量が高く、「将来展望」とした。これらの因子間相関は.47( $p<.01$ )であり、各因子は相互に関連しているといえる。また、尺度の信頼性を検討するため、各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、それぞれ.88, .81となり、いずれも高い内的一貫性が

認められた。

なお、因子分析の結果は、長谷川（1995）と一部異なっている。今回「将来展望」因子として高く負荷した「両親や友達がすすめる学校・学科、職業であっても、自分に合っていないと感じるものであればことわることができる」、「本当に好きな学校・学科、職業にすすむためには、両親を説得することができる」については、「主体的決定」の因子の質問として想定されたものであるが、本研究における調査においては、物事に対処する背景にある将来の生き方、目標等を測定する質問として機能していたと考えられる。

これらの進路決定自己効力感の2因子において、本件逮捕前無職者（12人）かそれ以外か（本件逮捕前有職者（23人）又は学生（21人））によって得点に差があるか $t$ 検定により確認したところ、いずれにおいても有意な差は認められなかった（Table 2）。

## ②非行少年における進路決定自己効力感と問題行動歴との関連について

まず、男女において、進路決定自己効力感及び問題行動歴の得点に差があるかどうかについて、 $t$ 検定により確認したところ、いずれにおいても有意な差は認められなかった（Table 3）。このことから、以後の分析は男女を区別することなく一つのデータにして行った。進路決定自己効力感と問題行動歴との関連を調べるために、各項目に関して相関関係の分析を行った結果（Table 4）、ピアソンの積率相関係数は、「将来展望」と「粗暴犯」との間で、 $r=.22$  ( $p<.10$ )と有意傾向であり、将来展望を持っている者ほど粗暴犯に及んだ経歴が多い傾向が明らかとなった。

## ③非行少年の進路決定自己効力感と、現在までの親の養育態度との関連について

②と同様、まず、男女において、親の養育態度に関する尺度の得点に差があるかどうかにつ

Table 1  
CS 尺度項目平均・SD と探索的因子分析結果

項目	平均 (SD)	因子 パターン行列	
		F1	F2
第1因子 主体的決定 ( $\alpha=.88$ )			
自分の能力に合うと思われる学校・学科、職業を選ぶことができる。	2.96 (.91)	1.04	-.17
自分の能力を一番いかせる学校・学科、職業を選ぶことができる。	2.89 (.98)	.93	.06
自分の趣味や関心に合うと思われる学校・学科、職業を選ぶことができる。	3.27 (.82)	.63	.39
いま考えているいくつかの学校・学科、職業の中から少しずつひとつひとつにしばっていくことができる。	3.25 (.98)	.45	.37
第2因子 将来展望 ( $\alpha=.81$ )			
将来のライフスタイルについて自分なりの考えを持っている。	3.39 (.82)	.40	.71
将来のために高校や専門学校でやってみたいことがあり、また就職してもその後の生き方について考えることができる。	3.34 (.82)	.30	.56
将来の目標に向かって、数年先まで計画を立てることができる。	2.98 (.98)	.39	.49
自分の理想の仕事を思いうかべることができる。	3.30 (.99)	.46	.46
両親や友だちがすすめる学校・学科、職業であっても、自分に合っていないと感じるものであればことわることができる。	3.59 (.73)	-.05	.45
本当に好きな学校・学科、職業にすすむためには、両親を説得することができる。	3.45 (.85)	-.09	.40

因子間相関	
F1	F2
F1	.47**
F2	

\*\*\*  $p<.01$ .

Table 2  
無職・それ以外の別のCS尺度得点の差 (*t* 検定)

	主体的決定	将来展望
就労・就学状況		
無職 ( <i>n</i> = 12)	11.58 (3.55)	18.92 (4.78)
それ以外 (有職・学生; <i>n</i> = 44)	12.59 (3.06)	20.36 (3.38)
<i>t</i> ( <i>df</i> )	.98 (54)	1.20 (54)
<i>p</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>

Table 3  
男女別のCS尺度得点及び問題行動歴の差 (*t* 検定)

	主体的決定	将来展望	粗暴犯	財産犯	性犯	物質乱用	住居侵入
性別							
男 ( <i>n</i> = 48)	12.58 (2.92)	20.25 (3.46)	3.94 (3.78)	3.33 (3.30)	.60 (2.06)	1.04 (2.02)	.88 (1.14)
女 ( <i>n</i> = 8)	11.13 (4.42)	18.88 (5.17)	3.25 (3.01)	1.88 (1.89)	.63 (1.41)	1.25 (1.49)	.50 (1.07)
<i>t</i> ( <i>df</i> )	1.21 (54)	.97 (54)	.49 (54)	1.21 (54)	-.03 (54)	-.28 (54)	.87 (54)
<i>p</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>

Table 4  
CS尺度各下位項目と問題行動との相関関係

	粗暴犯	財産犯	性犯	物質乱用	住居侵入
主体的決定	.15	-.11	.22	.08	.03
将来展望	.22 <sup>†</sup>	-.08	.11	-.01	-.02

<sup>†</sup> *p* < .10.

Table 5  
男女別の親の養育態度得点の差 (*t* 検定)

	情愛	依存期待	決定尊重	信頼	コミュニケーション	疎外
性別						
男 ( <i>n</i> = 48)	23.88 (3.67)	16.23 (1.96)	16.67 (2.82)	18.71 (4.41)	14.81 (5.41)	15.25 (4.57)
女 ( <i>n</i> = 8)	21.75 (6.71)	14.00 (3.55)	15.50 (4.04)	16.25 (6.82)	13.63 (7.03)	15.13 (5.82)
<i>t</i> ( <i>df</i> )	.87 (7.71)	1.74 (7.73)	1.02 (54)	1.08 (8.23)	.55 (54)	.07 (54)
<i>p</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>

Table 6  
CS尺度各下位項目と親の養育態度との相関関係

	情愛	依存期待	決定尊重	信頼	コミュニケーション	疎外
主体的決定	.44 **	.17	.25	.40 **	.34 *	-.08
将来展望	.34 **	.23	.46 **	.54 **	.37 **	-.04

\*\* *p* < .01., \* *p* < .05.

いて、*t* 検定により確認したところ、いずれにおいても有意な差は認められなかった (Table 5)。このことから、以後の分析は男女を区別することなく一つのデータにして行った。進路決定自己効力感と親の養育態度との関連を調べるために、各項目に関して相関関係の分析を行った

結果 (Table 6)、ピアソンの積率相関係数は、「主体的決定」については、「情愛」(*r* = .44, *p* < .01), 「信頼」(*r* = .40, *p* < .01), 「コミュニケーション」(*r* = .34, *p* < .05) で有意であり、主体的決定を行う姿勢がある者ほど、親から情愛をかけられ、判断を信用され、悩みなどについて

て話すことができていたと感じていることが明らかにになった。また、「将来展望」については、「情愛」( $r=.34, p<.01$ )、「決定尊重」( $r=.46, p<.01$ )、「信頼」( $r=.54, p<.01$ )、「コミュニケーション」( $r=.37, p<.01$ )で有意であり、将来展望を持っている者ほど、親から情愛をかけられ、自身の決定を尊重してもらえ、判断を信用され、悩みなどについて話すことができていたと感じていることが明らかにになった。

## 考 察

本研究の結果、少年鑑別所に在所している非行少年において、主体的決定を行う姿勢がある者ほど、親から情愛をかけられ、判断を信用され、悩みなどについて話すことができていたと感じていること、将来展望を持っている者ほど、親から情愛をかけられ、自身の決定を尊重してもらえ、判断を信用され、悩みなどについて話すことができていたと感じていることが明らかにになり、進路決定における主体的決定力や将来展望の強さには、親から情愛をもって関わられ、決定や判断を尊重され、コミュニケーションを多く持ってきたと、子が認知していることが影響すると考えられる。しかし、進路決定自己効力感のうち将来展望が強い者ほど粗暴犯に及んだ経歴が多い傾向からは、自分の欲求を力づくでも実現しようとする姿勢が見て取れ、先述のような親の養育態度は、子の行動的・積極的な姿勢を促すものの、それは成熟した自律性・主体性に基づくものではなく、短絡的・自己中心的な欲求充足傾向に基づくものであることが推察される。

また、進路決定自己効力感の主体的決定及び将来展望の得点は、本件逮捕時に無職であったか有職又は学生であったかによって差がなかったことから、非行少年においては、主体的決定力や将来展望を強く持っているかどうかは仕事に就く上で関係がなく、自分の能力や関心等を踏まえ、将来に対する計画的で肯定的な展望を持って職業選択を行っているとは限らないことがうかがえる。

以上のことから、非行少年においては、職業観等に対する問題意識が低く、これには親の関わり方が影響している可能性が見てとれるため、再犯防止・改善更生のための社会復帰支援策をより効果的なものにするためには、まずは自己の能力や興味に対する理解を深めることが重要であるとともに、職業についての知識・技能を付与する際に、それぞれの職業がどのような活動要素で構成されるかについても併せて知識を付与し、必要となる技術や能力をこまかく示すことも大事であると思われる。つまり、例えば「教師」という職業には、「人に物事を教える」という技術のみならず、「人を観察する力」、「資料を整理する力」等の技術も必要などということも併せて情報提供することで、「人に物事を教えたい」というだけの動機による短絡的な進路決定を防ぐことができるとともに、職業を維持する上での覚悟や必要となる技術の習得に努めることができる。また、親との関係性についても、一見親和的な関係にあるようであっても、成熟した自律性・主体性を育むような関係性にあることが重要であるため、親に対しては、子への関わり方を見直し、甘やかしや増長につながることをないように注意を促すことも必要である。

今回、少年鑑別所在所中の非行少年の現状を把握することを目的とし、本件逮捕時の就業・就学状態、現在の進路決定自己効力感、現在までの親の養育態度、本件を含む現在までの問題行動歴について調査を行ったが、問題行動に及んだことにより少年鑑別所に在所しているという状況から、上記の要因の時系列を整理することが難しく、因果関係について説明することは困難であった。今後の研究課題としては、少年鑑別所又は少年院を出た後の就労状況や再非行状況を追跡することにより、上記施設に在所中の親の関わりや矯正教育等の働き掛けを通じて、進路決定自己効力感がどう変化するか、また、それが実際の就労や再非行にどう影響するかについて検証し、より現実的・具体的な示唆につなげることが重要であると考えられる。また、今後、解釈するに十分な調査対象者数を確保し

ていく必要があり、特に、今回女子少年は56人中8人と非常に少なかった。今後は性差についての考察も必要であると考えられ、女子少年の調査対象者数も増やすべく調査を続ける必要がある。

## 引用文献

- Armsden, G.C., & Greenberg, M.T. (1987). The inventory of parent and peer attachment: Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454.
- 藤井 まな (1994). Parental bond に関する基礎研究——育児ストレスとの関連性—— 関西学院大学教育学科研究年報, 20, 89-103.
- 長谷川 龍彦 (1995). 中学生用進路決定に対する自己効力測定尺度作成の試み 学校教育研究, 6, 31-47.
- 法務総合研究所 (2012). 平成24年犯罪白書 法務省
- 井上 俊哉・大井 京子・西村 純一・井森 澄江・齊藤 こずゑ (2006). 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ——PBIとIPAの尺度の再検討—— 東京家政大学研究紀要, 1, 46, 245-251.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.
- Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.